

婦人の子死と毛

第五卷
第九號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照同は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分加纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年九月二日印刷
同 年九月五日發行

不許
複製

發行所	東京市麴町區飯田町四丁目十二番地
編輯者	東京市有馬町區錦町一丁目十九番地
印刷者	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所	女子高等師範學校附屬幼稚園内
發行所	東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發賣所	金昌堂

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合會社 ● 同北隆館

婦人と子ども 第五卷第九號目次

卷 首

保育法夏期講習會々員

子 ども

小さい別嬪さん……………やまとの翁……………頁

日露戦争と動物……………林 天 然……………三

不思議な物語……………太田龍東譯……………四

婦人と子ども

實驗上の育児法……………醫學博士 瀨川昌着口述……………三

婦人と親族法……………太田 英隆……………七

貞一の記事……………そ の 母……………四〇

子供の不思議……………沼田 笠峰……………四四

フレール會俳句端書集……………鹽野 奇零……………四六

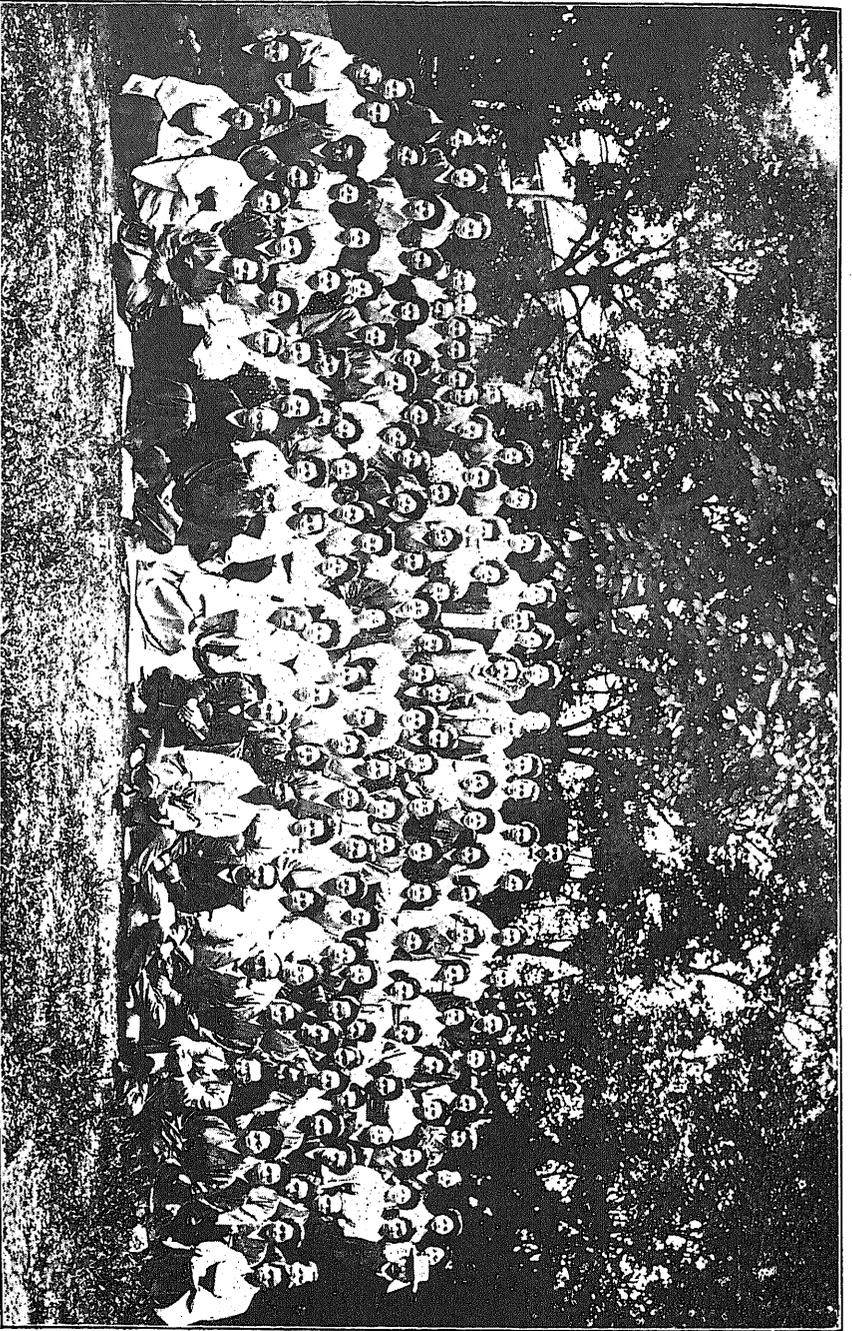
短歌募集……………みどり短歌會……………五〇

戦場の斷腸……………林 天 然……………五二

老人物語……………雨 峰 生譯……………五三

憐れな花賣娘……………村田 錦葉……………五五

東京便り…………………………五九



幼 稚 園 保 育 法 夏 期 講 習 會 師 員 會



もど子と人婦

號九第卷五第

もど子

小さい別嬪さん (ついで)

やまとの翁

大層な響をさせて出て来た彼の
 怪獸を一目見て、「別嬪さん」は、
 大方氣を失ふまでに吃驚しまし
 た。

大抵の娘でしたら、屹度恐ろし

さに齒の根も合はないで、ぶる／＼戦慄えて許り居るのでせうが、この娘は、中々利かん氣ですから、態と恐ろしい様な風は少しも見せませんで、ちゃんと構えて居りますと、怪獸は、どしん／＼と側まで寄つて來て、

「おい、お前こゝへは、自分から來るといつて來たのか

と聞きますから

「そうですとも、

と答へますと、

「うん、夫なら中々豪い、中々賢い娘だ、己に取つてもありがたい譯だ、お禮をいふよ」

恐ろしい怪獸の言ふことにしては、何といふ柔しい言葉だらうと、

妹娘はいっそ
不思議に思ふ
位くらゐでした。す
ると怪物おぼけは
「夫おれでは、向むか
ふの室むろにお前まへ
さんの寢床ねどが
あるから、今いま
夜よは、そこに
行いつて、ゆつ
くりと休やすむが



よい
「
といつて置いて、
其儘そのまゝ出て行きま
した。
夫おれで、娘むすめは、其その
室むろに行いつて見みま
すと、そこには
今迄いままで見た事こともな
い位の立派うつくな装
り物ものなどがあつ
て、夜具よぐだの蒲ふ

團だのは目の醒める程奇麗なのです。

「あの怪獣は、今夜丈け私を生かして置いて、明日になったら屹度殺して喰べようと思ってるのだよ」

と思ひながら、床の中に這入りましたが、さて、これっきり、もうお父さまに遭ふことも出来ないのかと思ふと、悲しくって、
 とも眠り所でもありません。しかし其中にだんく、勞れが出て
 来て、何時か知らん、とろく眠ったかと思ふと、誰だか耳の側
 で、まことに柔しい清らかな聲でおこして居ます、はっと思つて
 目が醒めて見ると、それはく美しい神々しい一人の天女が枕元に
 立って居られるのでした。

「お前、決して悲しまなくつてもいいのだよ、お前の平生からの

心掛のよいことや、お父様に孝行なことは、ちやんと私が知って居ます、何れよい報があるに違ない」

といふかと思ふて、天女の姿は消えて仕舞ひました、然しこれは夢でありました。あくる朝になって、眞實に目が覺めてから

「あら、夢だったよ、夫にしても何だか不思議な夢だこと」

と思つて、少しは心丈夫になりました。さて起きて見ると、又朝飯がちゃんと出来て居ます、朝飯がすんでから、まあ一通り御殿の様子を見物しようと思つて、そこいらを歩き廻はって見ますと、何處も此處も、立派なこと、言つたらとても口に言ふことも出来ない位、其中に不圖、或室にきますと、「小さい別嬪さんの室とかいた札が出て居ます」あらまあと思つて、戸をあけて這入つて見ま

すと中は一段と奇麗です、ピアノもあれば、いろいろの書物もある、お化粧の道具から、さまざまの装り物から、何から何まで見事な物許り、ちゃんと揃って居ります、

「まあ、奇麗なこと、これでは怪獣は、すぐ私を喰べて仕舞ふのでもないらしいわ」

と、思つて尙よく見ると、

「悲しむことはない、恐れることはない、思ふことをいってごらん、何でも私は其通りにする」

と書いて居ます、

「あら、これで見ると、怪獣は割合に親切なんだわ、けども、私、何よりか一番お父様にお目にかゝりたいのだから」

といつて、ちよいと、壁にかゝつて居る大きな鏡を見ますとこれは不思議、心配さうに俯きながら馬に乗つてお家の前に着いたお父様の姿が、其儘映りました。

「あらっ」

と思はず、側に寄つて尙よく見ますと、意地悪の二人の姉さまたちが、家から出てお父様を迎へて居ます、そして二人とも心配相な顔付して居ますが、心の中では、反つて喜んで居るのが、ありありと分つて居ます。すると見て居る中に間もなくこの繪は消えて見えなくなりました。

其中に、晝時になりますと、又例の様にいろくの御馳走が用意せられて居ますし、夕方になると、ちゃんとお夕飯が出来て居ま

す、で、娘は、こんな風であつて見ると、あの怪獸は、たゞ私を喰ふ丈ではない、少しは親切な心もあるらしい、と考へて居りました。しますと、其夕方、又のさりくと大きな歩音をさせながら、恐ろしい怪獸は娘の室へ這入つてきました。娘は又今更の様に恐ろしさに胸をどきどきさせて居ますと、怪獸は、妙に優しい聲で

「小さい別嬪さん！ 卿の名は「小さい別嬪さん」といふんでせう？」

「え、そうです」

「今から少しの間こゝで一所に話をしても宜でせう、若し不可なけりや、そういつてくれれば直出て行きます」

「え、可いですとも」

「然し、卿は私を大層恐い姿だと思ってるでせう？」

「眞實にそうです、私は偽いふのが嫌ですから……然しお前さんは中々親切だと思つて居ます」

「なる程……然し私はこんな怪獣なんですよ」

「然し、世の中には外形が人間であつて心の怪獣の人は澤山あります、兩方の中で私は外形が怪獣でも心の正しい方がよいと思ひます」

と申しました所が、怪獣は大層嬉しい様な顔付をして居ました。そうして居る中に十時頃になりますと、又明日來ませうといつてのつきくと歩いて出て行きました。それからといふものは、毎日く夜の七時頃になると、屹度お怪獣がやつてきて、いろく

の事を話して行きます、そのたんびに、怪獸は只の怪獸の様でな
 くて心情は中々優しい親切なものだといふことが分つてきて、お
 仕舞には、全く恐くも何ともない許りでなく、こんなに優しい心
 情でありながら、何故、あんな恐ろしい姿になつて居るのかと、
 反つて可愛相でならない様になつてきて、近頃では、お怪獸のく
 る時間が、何だが待ち遠しい様な氣がして來ました。
 其中にだんく日數が経つて、彼れこれ三月にもなりましたから、
 ある日のこと、別嬪さんは、自分の室の大きな鏡を見て、しきり
 にお父様のことを思つて居ますと、不意にお父様の姿が映りまし
 た。然し驚いたのは、お父様が非常な大病で、誰も介抱する人な
 しに、たった一人床の中で苦しんで居る風が、はつきり見えまし

たから、これは大變、急に歸って御介抱せねばならぬと思つて居りますと、丁度七時頃になつて、いつもの様に怪獸がやつて参りましたから、其事を話して、どうか暫らくお父様の所へ行かして下さいと頼みますと、怪獸も大層困つた風でしたが、やがて

「私は卿が居なくては生きて居られないんだから、眞實は歸すことが出来ないんだけども、そういうふ譯なら仕方がない、今から歸して上げよう、其代り一週間したら是非返つてきて貰はう、一週間過ぎて返らなければ、私は屹度死んで仕舞ふから、其積りで居なさい」

といふ、娘は大層喜んで、一週間には屹度歸るからといふ約束で、御殿を出ますと、何だか風にも乗つた様な心地で、ふわーりと

瞬またく間まに家うちに着つきました。

「まあよかった」

といふので、大急おほいそぎで這入はいって見みると、お父様おとうさまは鏡かみどりに映うつつた通り
非常ひじょうな大病たいびょうで、うんく獨りひとでうなつて居ゐましたが、小ちひさい別嬪べつひん
さんの姿すがたを見みると、いきなり病氣びょうきも何なにも忘わすれて、起おきき上あつて來きて、

「おう、よう戻もどつた」

といつて、抱だきよせました。そこで、別嬪べつひんさんは、いろく介抱かいほう
しながら、今迄いままでの有様ありさまをお話はなししますと、お父様おとうさまは、一々いっさ感心かんしんして
聞きいて居ゐます。そして娘むすめの風かぜを見みますと、なる程ほど、今迄いままで家うちに居ゐた
時ときとは、丸まるつきり違ちがつてまるで、お后様きさきさまの樣ように、衣物きものから、首輪くびわ
から、目めの覺さめる程ほど立派りつぱになつて居ゐます。さて、「姊ねえ様さまたちは」と聞き

いて見ますと、二人とも、つい此間お嫁に行つたといふこと、然し、あの通りの性質だから、行つてから二人とも始終喧嘩ばかりして居るのだといつて、お父様は、しきりと嘆いてお話ししました。さて、「小さい別嬪さん」が一生懸命に御介抱致しました爲めにお父様の御病氣も、だんくよくなつて來ましたが、二人の姉様たちは、妹が大層立派になつて戻つたといふのを聞いて、或日のこと久しぶりで態々お父様の所へやつて參りました。そして妹の美しい姿を一目見て吃驚するやら嫉ましやらで堪りません、そこで、中々意地がわるいのですから、どうにかして妹を苦しめてやりたいたいのだとだんく二人で相談をして、とうく一つの悪企を考へだしました。夫はこうなので、一週間の約束で歸つたのだから

ら、何とかして夫よりも永く妹を引っぱって止めて置かう、そうすれば、怪獸は屹度怒って妹を非道い目に遭はすに違ない、とまあこんな相談をきめて、夫からといふものは、二人の姉様たちは、前と打って變つて妹に優しくします。

かれこれして居る中に、とうとう一週間目になりましたから、「小さい別嬪さんは、お父様の側を離れるのは、如何にも悲しいのであります、あれ程怪獸に約束したのですから、仕方がありません、いよいよ怪獸の處へ歸らうとしました所が、二人の姉様たちは、「折角来たのだから、もう二三日は留っておいで、今度お別れしたら、もう遭へないかも知れぬから」などいって、いろいろ親切にとめるのです、妹娘は、姉様たちに深い企のあることゝは知

らず、夫では、こんなに親切に言ってくれるのは、平素からの意
 地悪が直ったのだらうと思つて、大層喜んで、あの約束のことも
 氣にかゝつてならないのでしたが、姉様たちの折角の親切を無に
 するのにも、困るしと思つて、夫ではといふので一日のぼして明日
 にしましたが、其日になると、又もう一日といつてとめられて、
 とう／＼十日目になりました。すると其晩の夢に、彼の怪物が一
 人お庭にうち倒れて、今にも死に相に苦しんで居る有様をはつき
 りと見ましたから、さあ心配で／＼堪らなくなりました。出る時
 にあんなに固く約束してきた事を思ふと、怪物が、どんなに自分
 を待つて居るかも知れない、歸らなければ生きて居らないといつ
 たが、夫を思ふと、夢に見た通り、眞實に死にかゝつて居るかも

知れない、まあ、あれ程自分に親切にして呉れたのに、約束を守らなかつたといふのは、どうしてもこれは私の方が悪いのだ、後れたけども、今日は直歸りませうと決心めて、大急ぎで支度してお父様にお別れをして家を出ますと、又風にのつた様な鹽梅に、ふわりと御殿へ歸つて参りました。そして自分の室に這入つて、怪獸のくるのを待つて居ましたが、どうしたのか、例の時刻になつても、中々やつて参りません、どうも變だなと思つて、御殿中を探し歩いてお庭に出た所が、丁度、夢に見たと同じ様に、怪獸が、お庭にたつた一人うち倒れて苦しんで居ります。「これは」と思つて、急いで側に寄つて

「どうも遅くなつて濟まないことをしました」

といつて親切に介抱しました所が、怪獣はやつと目を開いて、
 「おう戻つてきてくれたか、私は、卿が約束を忘れたから、始め
 言つた通り、もう生きて居ない積りで、何も喰べないで死にかゝ
 つて居るのだ、」

といひますから、「小さい別嬪さん」は、何だか大層悲しくなつて
 「いえ、そんなこと言はないで、どうか生きて居て下さい、こ
 れからは、もう何處へも行かないで、一生お側に居ますから」
 と言つたと思ふと、急に御殿中が眞晝の様に明るくなって、何處
 でももなく、美しい音楽の音が聞こえて、そこいら一面に喜びの
 聲が湧く様に起つて來ました。そして何時の間にか、恐ろしい怪
 獣の姿が消えて仕舞つて、其代はり立派な宮様見た様な年の若い

紳士が立って居られます。

「おや、怪獣は何處へ行ったのでせう。

と不思議に思つて尋ねますと、

「私が其怪獣なんです」

といつて、紳士は、悪い魔神の爲めに、今迄あんな姿に代へられて、誰か心の正しい少女で親切に介抱してくれる者がある迄は元の形に歸へることが出来ない事にせられて居た事から、今迄、大抵の人は皆一目自分の恐ろしい姿を見て逃げて仕舞つて誰もきてくれるものがなかつた事などを咄して、漸「小さい別嬪さん」が來てくれたから、とうく元の形に歸へることが出來たのだといふことをこまゝと話しました。「小さい別嬪さん」は、一々吃驚して聞



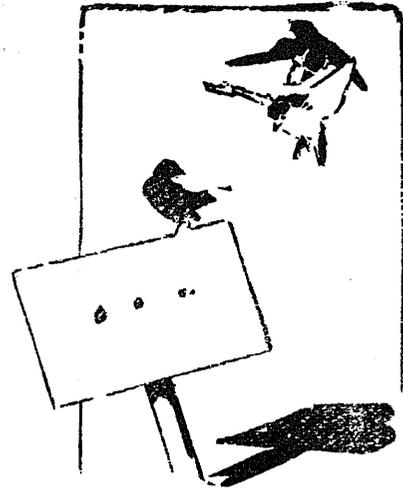
いて居ましたが「まあく」といふので、御殿の中へ連れて戻りますと、そこには、何時の間にか、お父様に、二人の姉様たちも参つて居ります。これは、妹娘が始めてこの御殿へ来た晩、夢の中に顯はれた天女がこゝへ連れて参つたのであります。そこで、天女は改めて三人に向つて、

「妹娘の優しい心と行とは美しい顔形よりは、どれほど尊いか知れぬ、善い行には善い報を上げよう。そして二人の姉娘たちの悪い事は私がよく知つて居ます、其罰として、二人とも、この御門の前に石像となつて妹娘の仕合せを見て居る役になるのがよからう其代はり、悪い心を改めさへすれば、何時何時でも、元の女の形に戻してやりませう、然し、眞實のことを言へば、二人とも何時

までも、石像の儘に立って居ることになるだらうと思ひます一
と言はれました。

それから、「小さい別嬪さんは、この紳士のお嫁さんになって、い
つまでも幸福に、この御殿に住ふことになりましたが、二人の姉
様たちは、天女の言葉の様に、眞白な石像になって仕舞って、御
門の兩側に立たされました。夫でもまだ意地悪を改めませぬから、
今になっても、やっぱり石像の儘に立って居るといふことです。

(おしまひ)



日露戦争と動物

林 天然

昔神武天皇が、九州の高千穂の宮から、御出になりまして、長髓彦を御征伐なすつた時、何處からだか、一羽の金色をしてる鵞が飛んで来て、天皇が御持になつてゐる、弓の上に止まり、ピカピカと耀きました。それから賊軍は忽ちに打破られ

てしまつたのです。戦の最中に金色の鵞が飛び来て止つたのは、誠に目出度い祥瑞であります。金鵞勳章は、即ち此目出度い祥瑞から出来ましたので、明治二十三年の紀元節に、始めて定められたのであります。

で今から十年許り前のこと、明治二十七年九月十七日、日本艦隊が大孤山沖で、支那の北洋艦隊を攻撃してゐた時、一羽の靈鷹が飛んで来て、高千穂艦の橋に止つて居るから、直ぐ水兵に捕えさせ、そして天皇陛下に献上したといふことは、誰でも御承知であらう。いつも日本が戦をすると、奇体に祥瑞があるのです。

今度露西亞と開戦すると、露西亞の旗標にある鵞が、そこから、こちらにも捕獲されたといふことが、屢々新聞紙上に載せられました。特に二

月十四日日本の水雷艇白鷹號が、朝鮮の某灣に碇泊してゐたとき、大きな鷲が岩角に止つて居つたから、水兵が直に翼を射つて之を捕え、宮内省に献上しました。

猶目出度いのは、日清戦争の際、靈鷹の飛び下つた高千穂艦が、他の軍艦と共に列をつくつて、某海を航行すると、大きな鯨が、フソリと浮び出たので、高千穂艦は、イキナリ鯨の中腹を衝き破つて進行したといふことです。

それから旅順口攻撃の時でしたら、日本から多くの鳩が、旅順口の方へ飛び行き、戦が終つてから、再びバラバラと群をなして、飛び還つたといふことが、當時の新聞紙にみえました。

次に四月三日、淺間艦が山東岬の沖を航行してゐた時、一羽の鷹が来て、甲板の上で硝兵をして

居つた、上等兵曹八頭司徳一郎氏の肩に止つたので、直ぐと之をつかまえ、暫く軍艦内で飼馴らし、それから海軍省に納めたのです。此八頭司上等兵曹は、日清戦争の時も、高千穂艦の檣に止つた、靈鷹を捕えた人だそうです、何んと妙じやありませんか。

四月十三日日本艦隊が旅順口を攻撃して、マカロフ提督を殲しました時、出雲艦へ二羽の鷹が来て止つたので、水兵安保助藏氏が之を捕え、戦が終へて歸ろうとした所が、また一羽の鷹が来て止つたので、再び之を捕え、通合三羽になつたのです。これは大本營に納めるといふことでした。

此他新高艦が、某海を航行してゐると、一羽の角鴞が飛来て、檣に止つたから、同艦の副長淺野正恭氏が、小銃で翼を撃ち、巧く擒えたが、二三

日經つてから死んでしまいました。所がまた一羽の鳥が、同艦へ来て止つたから、また翼を射つて之を捕え、毎日牛肉を喰はせて飼つてあるそうです。

今後まだ〜戦争が續くから、色々な動物が、日本軍の方に来るでしょう。或は黒鳩將軍が捕えられるかも知れませんが、そしたら頗る愉快ですな。序にいひますが、日露戦争があつてから、出征軍人の留守見舞の進物に、張子の虎が大部流行るそうです。これは「虎は千里の籐を越えて、再び千里の路を歸る」とか、或は「虎は死して皮をとどめ、人は死して名を残す」とかいふ意義でありましょう。

(おはより)

不思議な物語

太田龍東譯

一寸一言

世の中に、面白いお話も随分澤山ないではありませんが、この物語ほど面白くて不思議なお話はないだらうと思ひます。不錯すると皆さんは、斯様に思はれるでありませう、彼歴龍東が、なにそんな面白い緯を考へ出すものかと。いかにも、御尤も千萬なことで、龍東のやうなものがいくら考へたとて、怎碌なことを思ひつから筈は無いませぬ。

那歴にしても、なにか面白い緯の書いてある本でもあつたなら、せめて真似なりと爲して見ようと思ひまして、いろ／＼探した所が一つあつたのです。それは、西洋の本で、中には不思議なこと

ばかり書いてある、ごく面白い本であります。そこで龍東は、その中で皆さんに面白さうな枝を一本貰ひ受けまして、この雑誌へ譯換へたなら、さぞ美しい花が咲いて、みなさんに持て囃されるであらうと思ひましたので、こゝに譯ることにしました。皆さん、什麼か可愛つて見てやつて下さい、實に奇妙な花いやお話ですよ。

第一、漁夫の正太郎

こゝに、一人の老とつた漁夫がおりまして、その妻と三人の子と自分とを合せて五人が、家貧しくその日を送つてゐました。この漁夫の名を正太郎と云ひまして、雨が降つても風が吹いても、毎日朝から晩まで濱邊に立て魚を漁つてゐましたが一つ不思議なことは、獲物の有るなしに拘はらず、一日に四度の外は網を下さないのです。

ある日のこと、まだ朝日の昇らない時分から網を荷つて濱邊に出で、魚のゐさうな所へ一網颯と下せしに、何か入つたと見へ手堪がするから喜んで手元へ引寄せて見ると、筒はそも什麼に、魚ではなくて大きな馬の死骸でありました。漁夫は腹立ちて何やら呟きながら、二番目の網を卸しますと、又手堪がありますから、こんどこそ魚であらうと打ち喜びつゝ、急いで揚げて見ると、矢張魚ではなく巨大な古籠の破れたのでした。漁夫は一度ならず二度までも忌はしい物ばかり掛つて雑魚一尾もとれないから、嘆息して、我は何故こんな運が悪いのであらふ。こんなに朝早くから濱邊に来るのも、妻や子を養ふが爲めであるのに、神様は何を悪んで救つて下さらないのか。我は、他に金をもうける道を知らないから、魚が捕れない

いときは、妻や子は飢へて死ぬより他はない、さても無慈悲な神様の仕方ではないかと、且つは怨み且つは啣ち、悲しい聲を上げて叫びました。叫んで見たが何んとも仕方がないので、また三度目の綱を卸しましたが全じく魚は入らないで石や泥などでありましたから、漁夫は大に打嘆き遂にはそこに倒れてしまいました。

さうこうする中に、太陽の光りはキラ／＼と夜が明渡りましたから、漁夫は海水で口を嗽ぎ神を拜して、こん度は最後の四番目の綱を颯つと卸しました。こんどはと思つて陸地に引揚げて見ると、又魚ではなく銅作りの一つの壺であつたのです。かやと思つて手に取つてよく見ると、壺の口には嚴重に密封がしてあつて其上に刻印がしてあります、中には何があるか分らないが、之れを鑄物師

に賣つたなら少しの金を得て、今日魚の捕れなかつた代りになるだらふと喜びつゝ、壺の四方を打詠めてみました。さうして心の中に考へますには、こんなに嚴重に密封がしてあることを思へば、決度中には大切な寶物があるに相違ない、寶物があるとすれば早く中を檢めて見やうと思ひまして、衣囊の中から小刀を出して、密封を切り口を倒様にして振りました。けれど何も出ないから怪しみながら見詰て居ますと、あら不思議、忽ち壺中から變なものが出だしました。漁夫は何が出るかと腫を定めて見てみますと、一道の黒煙が次第立ち昇りて雲に近づき、四方は見る／＼海岸一面煙に蔽はれて眞暗となりました。漁夫は、餘りのことに膽もつぶれ、只呆れて夢に夢見ると心地して言語も出です、慄き居るばかりであります。皆さん、

この壺の中からどんなものが出るでせう。

第二、壺の中の怪物

漁夫は慄きながら見てゐますと、海岸一面に擴つた煙は集つて一となり、こんどは、それが三丈餘りもある世にも恐ろしき怪物となりました。この黒山のやうな怪物を見ていよく恐ろしくなり逃げ去らうとしました。足は痿へ腰はしびれて一歩も進むことは出来ません。このとき怪物は、天地も碎けるばかりの大聲を發して曰く
『汝は無慈悲なる人間であるから、この場ですぐ殺してやる。』

漁夫は、これを聞いてビリ／＼震ひながら、
『私は、今御身を壺の中から出して、自由の身としてあげたのに、なぜ無慈悲でありますか、又なぜ私を殺すのですか。』

と尋ねますと、怪物の云ふのは、

『我は、汝に自由の身としてもらつたから恩があるが、又汝を殺さなければならぬ事情もある。いま、その事情を語るからよく聞け。』

漁夫は睥睨で、次のやうなことを語りました。
『今から數百年前のこと、この世の中に二人の鬼神の大將があつた。一人は我で、他の一人は鬼山といふ鬼神であつた。ところが、この鬼山と云ふ奴は、我があると何にかに就いて邪魔になるから、どうかして殺さうと考へてゐた。あるときのこと、我一人寝てゐると、鬼山が澤山の鬼神を連れて来て、遂に銅壺の中に禁錮めて嚴重に刻印をし、海の中に投げ入れたのである。我がこの時の嗟嘆は如何ばかりであつたであらう。』

こゝまで語つて鬼神は、釜のやうな大きな眼から、

ポンプから水の出る如く涙を流して泣き、いかに
も残念さうにしてゐたが、又、言語を出して話し
かけました。

「我は海底に沈められて心の内にこんな誓を立て
たのである。この後百年の内に我をこの壺中から
救ひ出してくれるものがあつたら、その人一生は、
どんな望みでも思ふ通りにさして、富貴安樂にこ
の世を終らせやらふと思つた。それなのに、第一
期の百年は已に過ぎ去つたが、誰も我の命を救つ
て呉るものがない。

それで我は又誓を立てた。今から、百年間に我
を自由の身としたものがあつたら、その恩に報ゆ
るため、この世の中にある凡ての富貴安樂のこと
は、皆その人に與へてやると。誰か救つてくれる
人があるかと毎日待つてゐてもない。さうこうす

る中に、第二期の百年も又過ぎてしまつた、仕方
がないから、更に又誓を立てた、今から、百年の
間に、我を救つてくれるものがあつたら、その人
をある強い國の王様にして、平常その身を守つて
やつて、毎日三度つゝ、何んでも願ふことは遂げ
さしてやると思つた。こんなにして、毎日待つてど
暮せど救けてくれる人もなく、又もや百年の第三
期は過ぎた。

こうなつては我も耐忍できず、多年の不平は一
時に出て、こんどは、こんな誓を立てた。この後、
何時でも我をこの壺中から救ひ出すものがあつた
ら、誰でもすぐ殺して終ふと云ふことを。しかし、
その人を殺す方法は、救けられた恩義によつて、
刃で殺すか、撲り殺すか、水火に投じて殺すかは、
その人の云ふ通りにしてやることに定めた。我れ

がこの誓を立てたのは空しからず、始めてその思はかなつて、今汝の爲めに救けられたのである。

救けられた恩義は知つてゐるが、我は誓を立てた上は之れを破ることは出来ない。それだから、只その殺す方法は汝の望みに任かす。』

この不思議な怪神の長物語を聞く毎に、漁夫は呆れ惑つてゐたが、聲を出して、

『私は、三百年も海の底に沈んでゐた御身を、救ひ出して喜ばれる筈の所、却つて殺されなければならぬとは、餘り道理にかなはぬことであります。どうか今一度思ひ直して、その不正な誓を破つて下さい。』

と拜むやうに頼みますと、怪神は、

『いや、この誓は、我の百年この方立てたことであるから、汝の云ふことは、いかに道理でも、

之れを破ることは決して出来ない、只、汝に死ぬる方法を選ばしむるばかりである。』

と云つて、少しも聞きいれる風はありません。この時、漁夫は、

『私が、今こゝで命を取られるのは、何にかの因果だと諦めるが、後には、妻や子もあるから、可愛想だと思つて一命をお助け下さい。』

怪神は、怒れる聲を張りあげて、漁夫を礮と疾視つゝ、

『汝が何程頼んでも殺さずにはおけない、彼は云ふと、一層無惨なる殺し方をするぞ。』

漁夫は、いくら頼んでも仕方がないと思つたから、他に一の工夫を出して、怪神に對ひ、

『私の命は救けて貰へなければ仕方がないと諦めます。しかし、私は一つ疑はしいことがあります。

それは、御身がこの壺中に在つたと云ふのはどうしても信ずることが出来ない」と云ふことであります。もし、これが虚だとすれば、私は虚飾の爲めに一命を捨ねばなりません、願くば、眞實である」と云ふことを知らせて下さい。』

『我は虚を云ふものではない、之れを疑ふならば、天地の神に誓つて證明して見せう。』

と云つゝ、天地を拜して誓約を立てました。

漁夫は、早や仕済したりと喜び、

『天地の神に誓を立てた止は眞實であります、が、考へて見ると、御身のやうな大きな身体が、この細少な壺中に這入ふとは思はれません。百聞は一見に如かずと云ふことがあるから、この壺中に一度這入つて見て下さい。』

と云ひますと、怪神は冷笑ひながら、

『汝の云ふやうに、凡人の眼から見たら不思議であらふ、それでは、これから壺中に這入つて疑を晴らさしてやらふ。』

云ふが早い、天地を睥睨て咒文を唱ふると、不思議や怪神の形は、足からだん／＼頭まで煙の如く霧の如く消えて、丁度前の黒雲となりました。

その黒雲は、一道の煙に集つて、壺の中へ這入ると、天も晴渡りよい日和となつた。このとき、壺の中から漁夫に云ふのには、

『彼の疑ひ深き男よ、我は完くこの壺中に這入つたのである、これで汝の疑は晴れたであらふ。返事を爲ないかどうだ／＼。』

漁夫は聞えない爲して、側にある前の鉛板の蓋を取つて壺の口に當て、元の如く確と封じて、大き

な聲で打ち笑ひ、

『こりや、怪神ッ。汝のやうな無慈悲な奴は生かしてはおけない、元の如く壺中に入れて火の中に投じてやるから覺悟せ。』

と云ひますと、怪神は、壺中から悲しげな聲で、『前に汝を殺すと云つたの皆虚言だから、どうかこゝを出して下さい頼みます。』

と云ひますと、漁夫は、さも氣持好さうに、『怪神よ、汝は、神通力を有する怪神の大將ではないか、今、人間一人の爲めにどうすることも出来ないとは、さてもく意氣地なしでないか。また、前に言つたのは虚言だなど、はよくも云へたものだね、そんな口車には乗らないよ、汝は、この壺の中で死ぬるのが天命だから、壺中で往生するがよろ。』

と云ひますと、怪神は、また悲しげな聲で、

『壺を開いて我を自由の身として來れたなら、汝が望みは善惡に係はらず、何んでも満足と與へてやるから、どうか早く出して下さい。』

と頼みます。漁夫は、なかく承知せず、

『前きに汝を出して大そう困つたから、こんどは出さないよ。もし出したら、また、この身は今の汝のやうなことになるのは知れてゐる。汝を今出して自由の身としてやるのは、丁度、希臘王が、醫師のドウバンに救けられて、又、これを殺すのと全じやうなことになるのは、鏡にかけて見るやうだ。今汝の爲めに、希臘王と醫師との面白い談話をして聞かすからよく聞けよ。』

と云つて、漁夫は話しかけました。皆さん、この漁夫はこれから、どんな面白い話をするでせう。次號を樂んで待つてゐなす。



實驗上の育兒法 (承前)

醫學博士 瀨川昌耆口述

▲熱浴とレウマチス 日本人は西洋人と比較して從來一般に熱い温度の湯に浴する事が習慣で、此習慣を俄に改める事は逆も實行の出来ない斗りか日本人の爲めには熱浴を取る方が却つて衛生上利益を認めざる點が多いのです日本の家屋は前にも云ふ通り構造が實に不完全で、濕氣を含んだ空氣や寒氣の強い時などは西洋の建築のやうに充分之れを防遏する事が出来ない、又衣服も其通り肌を現はし易く、洋服の如く手の先きから足の先きまで規則正しく纏ふて置く事が出来ない、夫れ故やゝもすると季節の如何に

拘はらず寒冷に胃される、日本人がレウマチスと云ふ病氣に罹るものが多いのも、畢竟家屋や衣服の不完全なる關係からであらう、併し家屋の建築法や衣服の作り方が斯く不完全なるにも係はらず、日本人には猛烈なるレウマチスが割合に少ないのは全く熱浴の實と信する、濕っぽい空氣や冷たい寒い空氣に肌を曝露しても熱い湯で充分に身体を温めるからレウマチスの發病も豫防する事が出来るし、もしまた發病しても大抵の病症は熱浴のために自然に癒えて仕舞ふのである、之れを西洋人の如く温浴を取る事にして攝氏三十五六度の湯に浴つて居たら、日本人はなほ一層強きレウマチス症に侵され之れが日本人種の痼疾となる不幸を招いたかも知れぬ、幸に熱浴の習慣で之れを防遏し得たのは最大なる幸福と云はなければならぬ、夫れにレウマチスの治療法として熱浴療法を勧める事があるが、從來熱浴の習慣とレウマチスとの關係は全く此の療法と一致した説である

▲無害有効の熱浴 熱浴はレウマチスには有効であるが、然らば一般の衛生上には害があるかと云ふに、之れは大分世間で矢釜しい議論があつて、理屈の上からは害があると云はれて居る、去れど衛生上の事は一片の理屈をもつて全般を窮ふことは出来ぬ、理屈の上からは悪い事だ害になる事だと云つても實際之れ丈の弊害が現はれて、理屈の論據を確かめると云ふ事ではなければ其の理屈は空論と認めなければならぬ、夫れと同じ事で日本人は西洋人の如く攝氏三十五六度の温浴を取らずに四十度を越へた熱浴を取るのには衛生上害があると唱へた處で、未だ是々の害が的面に顯はれたと云ふ事も無く、子供の時

ら熱い湯へ浴つて居ても何れ丈の害があつたと云ふ事實も認めない、殊に昔から日本人の習慣となつて居た事であればヨシ理屈上では熱浴は害があるとした處で、實地の上には夫れ程の害は顯はれないものです、況して事實上から無害を證明されて居る事なれば私は日本人の爲めに熱浴を無害有効と信ずるのである、去り乍ら一言申添えて置きますのは以上のお咄は健康の人に對して云ふので、或る場合即ち心臟病、肺病のある者、逆上し易き人など平生健康ならざる人々には四十度以上の熱浴は堅くお禁め申します、入浴中卒中症を起したり肺病患者が咯血したりする事はよくある事です尙夫れと長湯をする事は宜しくないので、御婦人方の長湯は一層御注意を願ひたい

▲産湯の始末　お咄しが枝葉に渡つたが、本論へ戻つて産湯の事をも少しお咄し致さう、産湯の行はせ方は産婆の役目であるが、舊産婆杯は随分無鐵砲な行はせ方をするから特に御注意申して置くのです、産兒の体を洗つた湯で直ぐに顔や眼を洗つたりすることのないやうに顔や眼は必ず別の器へ新たに湯を盛り夫れで洗ふやうになさい、又淋毒ある母なら藥液點眼の外に嚴重に産兒の眼を注意しなければならぬ、ソコで良質なる石鹼で身体を洗ひ清め全く湯を行はせ終つたなら、軟き手拭か又は軟き西洋手拭にて必ず手早に拭いて産衣を着せ、豫め用意せし蒲團の上へ安らかに寝せるのである

▲生兒の入浴　生後凡一ヶ月間は毎日一回宛湯をつかはせ、石鹼で身体を洗ひ清めねばならぬ、殊に頭部、腋の下、股間等に注意して垢のつかぬ様に洗ふがよい頭皮からは脂肪の分泌が盛な爲に稍もす

ると脂肪が堅く附着して痂皮となり、其上へ塵埃が付いて次第に不潔になる斗りだから、毎日丁寧に軽く洗い落すやうに仕なければならぬ、夫れから腋の下や頸の下、股間、又肛門のあたりも垢や皮膚の分泌物が着いて夫れが分解される爲め此の部分は糜爛で小兒は非常に煩惱つて困るものだから丁寧に洗つて遣るが宜い、殊に股や臂の邊は大小便の汚れから日に幾度となく湿布を取りかへる其度毎に其の部分を手拭を湯に浸して拭ひ、其のあとをば乾いた手拭で靜に拭ひ若したゞれたなら拭いたあとへ亞鉛花澱粉か普通の白粉を撒布と糜爛は次第に癒つて仕舞ひます

▲襦袢は裏返しにせよ 生兒に産湯を浴はせて仕舞つたら、裸体では置けないから取敢ず着物を着せなければならぬ、此の着物が即ち御承知の通り産衣であるが、之れは何ういふ品質を選んで何ういふ臘梅に裁縫したのが適當であらうか、又是れ迄の習慣上如何なる弊害を矯正せねばならぬか私の實驗をお咄し致さう、先づ下には襦袢を一枚着せなければならぬが、總て肌へ直接に着く布の品質は毛布よりも絹布よりも一番綿布が適當で、詰り晒木綿類の成可く軟かい一旦水に入れて糊を落したのを貴びます、ソコで縫方は筒袖にするので袖丈と袖付けを各々三寸五分位にするのです、出来上つたなら其の襦袢を裏返しに仕て着せる事を忘れてはなりません、斯うすると縫目の襷が生兒の軟かい皮膚へ當るやうなこともなく、磨れたり爛れたりする心配もないのです、私は自分の小兒には孰れも裏返しにの襦袢を着せ、肌着のために生兒の皮膚に故障を起した事など一度もありませんでしたから是れは是非お勧め致すので

わります

▲産衣の改良

襦袢の上へは一つ身を着せるのが通例である、是れも縫方を改良して袖丈と袖つけを

各四寸にするのです斯うすると生兒の手を樂に袖へ通すことの出来る斗りでなく、附紐を締める時に

丁度袖の下へ締めるやうになつて別に入口を明ける必要もない、爾うして襦袢と重ねても襦袢の袖の前

に申す通り三寸五分位ですから一ツ身とは樂に重なります、袖丈や袖つけが定つたらソコで綿を入れて

綿入の一つ身に拵へるのです、綿の入れ方は青梅綿を胴の處へは三枚、腰と袖へは二枚位に致すのが先

づ適當である、テ夏の熱い時候に産れた生兒には此綿入を一枚と襦袢一枚で宜しいが冬の寒い時分には

此綿入を三枚ふ着せなさい、尤も衣服は氣候との關係であるから斯うお咄し仕たからと云つて何處の

土地でも必ず之れ丈着せよと云ふのではない、其土地の氣候によつて臨機の處置をするのが必要であ

るが、右は東京の氣候で實驗した程度をお咄しするのであるから其お積りに御承知を願ひたい

▲産衣の色と附紐 産衣の色の事を序に申して置かう、從來茜木綿とか、鬱金木綿を用ゐるのが一般

の例になつて居るけれど稍もすると斯ういふ色が皮膚へ染つて非常に不潔になるものである、是れは甚

だ宜しくないから凡て襦袢は白の色にするし、又一ツ身も裏を付ける時、裏丈は必ず白を選ばなければ

ならぬ、尙附紐の附け方は申す迄もなく後ろ紐にして前へ廻して緩やかに締めるやうになさい

婦人（しんじん）と親族法（しんぞくほふ）
（承前）

太田英隆

第二款 戸主権の失格に因る消滅

第一項 隠居

隠居とは、皆さん御承知の通り、子に世を渡して自分は戸主の地位を脱退することでありまして、これも戸主喪失原因の一であります、この隠居制度なるものは、上古には無つたのでせうが、中古佛教の傳來と共に輸入したやうに思はれます、歴史を見ますと、食老俗或は棄老俗など云ふ悪風が行はれてゐたことがあります。之れ等を少し研究して見ますと、面白いやうでありますが、こゝには左程必要でありませぬから述べませぬ。

第一段 隠居の要件

隠居をなすには、左の五個の件を備ふることが必

要としてあります。

第一 満六十歳以上なること、

第二 完全な能力を有する家督相續の現在すること、

と、相續をする者が馬鹿とすれば、その家の榮枯に係はりますので、相續人が、未成年者、禁治産者、準禁治産者、又は妻のやうな、法律上完全な能力のないものは、獨立に家政を執ることが出来ないから、後續は出来ませぬ。

第三 其家督相續人が相續の單純承認を爲したること、

こゝに單純承認と云ひますのは、相續する人が、一切の權利義務を無條件で繼承することを示すので、前の戸主が、借金をしてゐるから、私は相續しても借金の後仕

第四

本人の任意に出づること、
 その隠居が、隠居する人の任意でなく、
 家族が無理にさせた押込隠居は、之を取消
 す請求することが出来ます。隠居は、他人
 の干渉を入れませんから、無能力者が隠居
 するときでも、法定代理人の同意を要せな
 いで、獨立で決定することが出来ます。

第五

戸籍吏に届出づること、
 隠居するには、戸籍吏に届出でなければ

舞だけは爲ないと云ふやうなは、限定承認
 と云ひて、之れとは違ひます。さうして、
 推定家督相續人は、前戸主に借金が澤山あ
 つて、之れを返金するの義務を負ふのが嫌
 いなら、債務の辨濟を留保して限定承認す
 ればよいのです。

第一

右述べましたのは、普通隠居の場合を云つたの
 で、之れから特別隠居の場合を述べます。
 第一 戸主は、年齢などは若くても、己むを得な
 い場合即ち、疾病とか本家相續とか又は本
 家の再興とか云ふ時には、裁判所の許可を
 得て隠居することが出来ます。

第二

戸主が婚姻によつて他に行かんとするとき
 例へば、女戸主が入夫を得る望なく、他家
 に入つて夫を求めんとするが如き、或は、
 男戸主が求む女が他の戸主であるから、自
 ら其家に入るの必要ある場合の如きは、裁

判所の許可を得て隠居することが出来ませぬ。

第三 女戸主は年齢に拘はらず、隠居することが

出来ませぬ。併し、配偶者のある場合は、夫

に服従するの結果、其同意を経ねばなりませぬ。

この外、隠居の効力、無効及取消の規定がありませぬが、之れ等は御婦人方には、直接必要も無さ

うですから消略します、若し御入要の節は、民法

第九百八十八條、第七百五十七條、第七百六十一

條、第七百五十八條、第七百五十九條、第二百

一 條、第七百六十條等を見なさればすぐ分ります。

さうして此等の條文は、素人が見てもよく解され

ますよ。

第二項 廢家

第二項 廢家

家を廢することが出来ると云へば、家族制度に

反するので、一寸變に聞へますが、新に一家を創

立した者は、之れを廢したからとて、祖先を祭る

に差支はありませぬから、之れを許しても家族制

度の本旨に悖りはしませぬ。それで我民法は、新

に一家を立てたもの、其他正當の事由あるものは

廢家することを許してあります。

第三項、女戸主の入夫婚姻及び

入夫離婚。

女戸主が婿を取つたときに、其婿を戸主にする

ことはいやだと云ふことを明示せぬ限りは、當

然女は戸主權を失つて、入夫が戸主となるのであ

ります。

入夫は、女戸主と婚姻したから戸主權を取得し

たとすれば、其原因である婚姻が解消すれば、縁

切となるのですから、従つて戸主権も無くなる譯
であります。こゝに一寸疑問となることがあつて、
世の中によくある例です。そは、右の場合にをき
まして、入婿が出てしまへば、前戸主であつた女
が戸主となることは明であります、若し其際子
供があつたとすればどうでせう。この時も女が戸
主になると云ふやうな人もありますが、それは大
間違で、その子供が相續規定によつて、戸主とな
るのであります。

第四項 戸主が婚姻又は養子縁組の

取消に因り其家を去りたる

とき、

婚姻又は養子縁組によつて他家に入つたもの
が、何かの事情で其家を去らねばならぬ時は、そ
の家を去ると共に、戸主権は消失するとは見安

とであります。が、こゝに一つ入り組んだ場合が
起つて参ります。婿養子縁組に因りまして、家の
娘と婚姻して其家を相續し戸主となつた時に、夫
婦の縁を切つたとしたなら戸主権は有るものでせ
うか。考へて見ますに、この時は單に夫婦別れを
した迄で、未だ養子縁組は其儘であります。すれ
ば、この婿は依然として其家の養子としてゐるの
ですから、戸主権も其儘存在するものであります。
之れで第二章は終りましたから、次ぎには第三
章を述べます。

貞一(承前)の日記(明治卅六年)五月生男(抜萃)

その母

五月廿日 牛乳をモーテツチ、ドーズ、オシツコ

ナイノと問へば、ナイノなどいひならふ

五月廿二日 今日 靴をはきて 外にて遊ぶ

犬を見れば 遠くから いゝこゝと撫る真似

をなし、近づき来れば 逃げ出す、母の傘を杖

の様に持ち、トンくとつきながら歩む

五月廿六日 カーチャン、トーチチャンをいひなら

ふ

五月廿七日 オンボンと〜といつて、茶棚を指さ

す故、御盆の事かと思ひしに、トンボの畫の茶

碗の事なりと、

今日は魚なき故、鶏卵三個を予ふ、

五月廿八日 卅一日の満二年の誕生日にといふ筈

なりしも、天氣都合もあればとて、繰り上げて

今日寫眞屋宮内に行く、父母安田さん、君恵さ

んとカビ子にての五人、父母と三人、貞一人

のと三度うつす、知らぬ所にて、余りチャホヤ

おもちゃなど出して、機嫌とる故、びつくりし

た様な顔にてうつす、かへり上野公園にて遊ぶ、

五月廿九日 オンデ(下ニ降ルコト) チャン(茶

碗) バンをいひならふ、

安田さんに畫をかいてもらふ事好きになりそ

れも バン 牛乳のびん、茶碗などを喜ぶ

五月卅日 外であそんで歸る時、玄關にてオーイ

といふ、父の真似をするなり、

五月卅一日 小原先生に行き見て頂く、体量一〇

一一〇、

成績誠に宜し、牛乳、魚肉共に分量を減ぜず

つゝけて予ふべしと ほめられて歸る

今日は誕生日なれば、従兄の名八さんや従姉の

春枝さんや、渡部の伯母さんが 静子さんを

つれて お祝に來て下さる、夜になりては君枝

さんも御出になる、いろ／＼のおもちやや、下駄や、美しいシヤツを皆様から頂く、貞一は大喜びにて、活潑にはね廻りて饒舌る、にーちゃんねーちゃんなど覺える、安田さんに、御祝ひに頂いた繪本の中、象と獅子の名を覺えたり。

六月一日 今日十時の御飯をすませ、安田さんにつれられ 本郷のきみえさんの家へ遊びに行く 隣の四つばかりの女兒と直に親しくなりて 戯る、太田の原に行き、池をまわりて、オイケく／＼とくりかへす、宅へ歸りて後、何所へいつたのときけば オイケと答へまたてふ／＼といふ 蝶々が御池の傍に居りしとの事なり、

六月三日 キシヤ、デンシヤ、ボチ等を覺えたり、

六月四日 ホネ、(魚ノ)マテ／＼コタ／＼などいふ、午後一時半 晝寝さめし後、左の腕如何

せしやシヤイ／＼といつて動かさず、おやつ喰べし後は 尙痛がつて、少しも動かさず 依つて樂山堂へ連れて行く、診察をうけしも 別に異状なしと歸宅後は、不思議にも、全く治せし様なりしが七時過ぎになりて又 シヤイ／＼といひ、一寸さわつても聲をあげて泣く、如何せんかと 心配し居る中、眠りし故明日の事にせん と其儘になし置きたり、

六月五日 腕の痛みは全く治したる様なり、

六月六日 今日例の如く 便通余り柔く 小水も余り黄色き故、小原先生の許へ使を走らせて薬を頂く、

午後より西片町十番地はの十九號へ轉居す 初め皆より先きに 安田さんと二人にて、車にのりて本郷に行く、途中大學の前まで來りしとこ

ろ、先日、君枝さんの許へ行つた時、こゝを通りしを覺え居りしものか、ねーちゃん、おいけくといふ、新宅にゆきしに、オンモくウチなどいひて、元の宅へ歸り度様子なりしも、後には馴れて、安田さんとかくれんぼなどして遊ぶ

六月八日 此頃は中々交際家になりて、外へ出し時、姉さんや兄さんの人を見ると、木の葉をつて渡したり、オイデくサヨナラくなどを、近所の誠之小學校にて、君が代を唱ふをき、大變好きになりたり、
六月九日 蝶々はときけば、フンくと鼻唄の様に拍子も調子も正しく唱ふ、たい詞が唱へぬ丈なり、雁々もア、にて唱ふ、クワツくも正しく唱ふ、

六月十一日 雨の事を、アネくといひ、ミ、をニニといふ、マムモの音は容易に發音したりしも、ミとメは、中々むつかしそうなり、
父母と市川氏の所に、遊びに行き、赤ちやんを見て、タツケく立たせやうとする。
六月十二日 繪本の、豹、月をムーンなど覺えたり

六月十四日 君が代の歌を、ヲハといふ
粥を一度だけ飯に代ゆ、
朝食 牛乳二〇〇瓦、パン二切
晝食 飯一椀、魚肉、十五匁、牛乳一〇〇瓦
かやつ 牛乳二〇〇瓦、パン一切
夕食 粥一椀、魚肉十五匁、牛乳一〇〇瓦
(パンは一日の分量四半斤なり)

六月十六日 粥を二度とも飯に代ゆ、

人をくすぐる事を覚え、母など 足袋をぬげば
すぐ足をくすぐる

子供の不思議

沼田 笠峰

青葉若葉の滴る木蔭に座つて、可愛らしい稚兒
は、赤く熟した林檎をかじりながら、ふと不思議
の念を小さき胸に浮べた。この世の光を浴びてか
ら、まだやう／＼五ツ年ばかりの幼い身にも、解
きたい謎は様々あると見える。先づ第一、不思議
で不思議でたまらないのは、あの大空に高く懸つ
て居る所の、大きな／＼火の玉なのです。

『毎日々々、青空を徐ろに歩いて、夜が来ると、
どこか見えない處へ行つてねんねする、あの火の

やうに燃えて居る玉には、大方鎖が附いてるんだ
らう。だけれども、その鎖はどんな所から始まつて、
どこにくつ附いて居るのか知ら。そしてもし、そ
の鎖が途中で切れて、大きな火の玉が落つちて
来たら如何だらう。それを大變、きつと人も鳥
も草も花も、みんな焼け死んぢまふねエ。イヤ
／＼、人は焼け死んでも鳥は死な、いだらう。…
……でも鳥には羽があるから、すぐあの冷やりし
た青空へ翔けて行つて、柔らかな白い雲の中へか
くれてしまふに決つてる。あそこへ行けば、何が
来たつて大丈夫、焼けつこなしさ。』

『どうかして、私も鳥になりたいなア。そした
ら、すーつと高い所まで飛んで行けるから、あの
白い雲が何で拵らへてあるのか、見てくることか

出来る。一躰、雲は羊のやうなものか知ら、大方
 そうだらう。羊が牧場で追つかけつこなんかして
 遊んで居るのと同じ様に、雲も、ホラ、動いてる
 じやないか、あんなにして遊んでるんだよ。そし
 て、青空は恰度羊が喰ふ草のやうに、雲の食物な
 のだらう。』
 と思つて見たこともあつたが、それは彼がモット
 小さかつた時のことで、だん／＼成長するに随つ
 て、少なくとも雲は羊でないことを知るやうにな
 り、また時によると、どうしても、雲は動物のや
 うに見えないと思ふこともあつたが、しかし雲も
 人と同じやうに物に感ずることを確かめて居た。
 なぜなれば、『地上に涙を流すでないか』と。人は
 これを稱して雨と言つて居るのである。

二

この世界に數ある物の中で、小さな子供が最も
 愛して居たものは、庭の林檎の樹のあたりに咲く
 草花であつた。

『何時だつたか寒い／＼日に、私はお母さんと
 一緒に、この黒い土を掘りかへして、何だか堅い
 ものを、その中へ投げこんで置いた。お母さんは
 それを種子だと教へて下さつて、そして春が来た
 ら花が咲くんだつて。それから私は毎日々々其處
 へ水を撒いて、どんな花が出て来るか待つて居た
 のです……随分いくつも寐てからだつた、先に
 種子を入れておいた土の中から、少し青いやうな
 芽が出て来て、それからだん／＼綺麗な葉が繁り、
 美しい色の花が咲いて、立派な木になりました。
 『たつた一ツ、どうも私の氣に入らないことが
 あるの。何ッて？ どうしても花が咲く所が見ら

れないんだもの。何時でも、如何して花が開くだらうと思つて、木の傍に番をして待つて居ても、一ツも見られない。それで朝早く／＼起きて、椽側へ行つて見ると、ほんとに花は目が醒めるのが早いんだねエ、もうチャント咲いて居るんですよ。』

三

昨日も今日も、幾日となく照り輝く暖かな清らかな日が続くので、子供は全く一生涯こんな暖かな日なのだらうと思つて居た。ところが、俄かに、時によると寒い／＼夜があることを知つたので、彼はまた考へ始めた。

『私はこんな暖かな好い寐床を持つて居るけれども、花は随分寒いことだらうねえ。きつと今頃は泣いて居るに違ひない。花は、いくら冷たい風

が吹いても、いくら日が入つてからでも、何も被るものを持つて居ないから、さぞ困ることだらうよ。』

と思つて、直に自分の小さな白い毛布を持ち出して、花の周圍から被せてやつて、『斯うして寐ねするんだよ』と言つて、やさしく敲きつけてやつた、恰度彼がお母さんに爲てもらふやうに。

斯んなに注意深く彼が愛憐つてやつたにも拘はらず、もはや花は、これまでの様に幸福な美しい色を示さなくなつた。その小さな美しい頭は落ちてしまつて、再び若い芽を出さない、林檎の木は、また黄ばんで来て、風のまに／＼散り布く地上に哀れさを現はし、やがて鳥も鳴く聲を止めて、一羽去り二羽飛んで、青空の方へ影をかくしてしまつた。子供の驚愕は一通りでない、あの

空にかゝつて居る大きな玉の、強い火が消えてしまつて、すべての人間も鳥や花と同じ様に、横に倒れて永き眠りに入りてしまはねばならないかと怪しんだのである。

四

或る朝、彼は窓の下へ行つて、太陽がまだ例の場所に高く懸つて、燃えつゝあるかを確かめやうとしたが、驚くまいことか、彼の見渡すかぎりは、白い羽のやうな片々が、静かに音もなく大空から落ちて來るのみで、それが地上のすべてのものを蔽うて居る、恰も寐床に於ける白い毛布が、彼れを包むかのやうに。

そこで彼は、氣も心もいら／＼してしまつて、あの可愛らしい花も矢張この白い毛布の様なものに蔽はれて居るかを見やうと思つて、表へ駆け出

した。而してその白毛布を外へ押し除けてやつて、見ると哀れにも、彼の花は萎んだまゝ硬くなつて仕舞つて、地上に冷たさうにくつ附いて居る。まるで、猫の鋭い爪に引つ搔かれて死んだ雀の子のやうなんだから、可憐さうでたまらなくなつた。

彼は大急ぎでお母さんの所へ告げに行つた。黒み勝ちの活々して居る彼の眼は、この時、涙がしばい漲つて、やさしい胸には驚愕の情が溢れて居た」

五

お母さんは、強き慈愛に充ちた腕に、愛しきその子を抱きしめて、自然界の大いなる驚くべき真理が、めぐりめぐる變化を正しく攝理して、決してその序を違へないことを語り聞かせた。如何なる花も、草木も、河の流れも、昆虫も、鳥も、獸も、

決して死ぬのではない、たい彼れ等の永き夜を通して、静かに眠つて居る、而してそれは冬と呼ぶのである。うらうら霞む暖かな日が来て、野にも山にも朝の榮光を浴びせるやうになつたならば、彼等は、幸福な静かな永い眠りから醒めて、再び新しい美しい生々した春を飾るのである。かくして春、夏、秋、冬、とこしなへに變ることなく、大いなる神の攝理の下に繰りかへされて、花も、鳥も、我も、汝も、すべてのものが安らかに生活を營むのであると。

* * * * *
子供は、お母さんの教訓を聞いて、ながい間の疑問を解くことが出来、幼稚園へ通ふやうになつては、先生から色々の道理を説き聞かされて、日は一日、成長するに随つて賢い人になるのである

が、その始めは、母なる人のやさしい説話を待たねばならないのである。

フレーベル會俳句端書集

- 一、課題 當季雜吟一人十句以下
- 一、締切 九月二十五日限り
- 一、披露 十一月發行本誌文苑欄
- 一、賞品 天地人三座には最品を呈す
- 一、撰者 當分本會の撰とす、
- 一、投稿 本誌購讀者は何人にも投吟する事を得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第十四回俳句端書集

藪寺や木魚叩けば蚊のわめく 東京 辰子
蓮提て鳥居潜らぬ女かな 全
澁團扇舩の顔にのせてあり 全

朝良や庭一面に藹ふかき 川越 歸迷

宿直の部屋を蚊やりの西詩吟 全

船借りて月に漕ぎ出す納涼哉 長野 曉霞

掬ぶ手に木影つめたし岩清水 全

寐覺よき田面十里や青嵐 仙臺 一瓢

靈祭る火の燃え跡や五戸の村 全

夕立のあとの片帆や與謝の海 全

朝良や紺屋の知らぬ色もあり 神戸 學洋

水草も葉裏を見せる暑さかな 全

短夜や枕に波の幾かへり 東京ゆかり子

見かへれば人の妻なり夏柳 全

將軍が戦死の野邊や鬱虫 大分 春月

破垣に零徐子得たり小三合 全

初秋や港につきし露の使ひ 武蔵 だるま

晒井や老の力の健やかに 駿河 樂水

弦齋の喰道樂や初茄子 大坂 きよ女

涼しげな水の流れや夏神樂 全

行軍や松原幾里蟬の聲 佐世保 柳月

七夕や陣所くの物がたり 在滿州 孤聲

雲散て夕日に残る暑さかな 全

戸をしめて愚痴を言ひけり初嵐 全

盆踊元祿風の結び髪 秩父 尹人

汲上ぐる水紫や萩の花 全

余所の子に先づ取られたり青瓢 全

虫啼くや忍びの客の戻りたる 全

秋の空我にやましき心なく 栃木 閑山

三光

天 夏瘦や敗將軍の目のくばみ 埼玉 帶水

地 陣中の今宵懐かし星明り 仙臺 一瓢

人 初秋や神馬を洗ふ五十鈴川 大分 春月

追加

無一庵奇零

溢團扇昔堅氣の主人かな

夏深し砲臺のわと草生ひて

汗拭きつ互に避暑の話かな

夕納涼燈明臺の徹白さ

夕涼し音楽堂に耳洗ふ

短歌募集

▲課題、隨意 ▲締切、毎月末日、▲發表、本誌上

▲賞品、三光に粗景 ▲撰評、眞宮起雲

▲投稿、用紙隨意左記の處に送らるべし

伊勢國河藝郡稻生村 みどり短歌會

○當撰發表

(天)古今歌文書網要一部 京都櫻井 芳野君

(地)雪月花一部 伊勢白浪 子君

(人)作歌自在一部 紀伊千仗喜美子君

短歌

起雲選

五十

(天)

やせく／＼て世を憤はる我ともと見れば興ある夏

菊の花

(地)

朝風にわはれ露ちる白蓮の清さをうたに此世終

へんか

(人)

ぬげ落ちし黒髪詩集にそと秘めてそゝろ心地に

秋の雨さく

◎

夕雲に思ひこらせて瘦せし身のかくれ髪寒し初

秋の風

はろく／＼と木犀かをる築山に匂ひこめたる夕月

のかけ

紀伊 千仗喜美子

伊勢 白浪子

小林 波香

◎

伊藤 敏

露重き芙蓉の蔭に身を寄せて詩集繙く歌心地か
な

時の魔がさぞむ針の音身に泌みて成すこともな
く又秋は來ぬ

◎

かほる

思ひありて獨さまよふ夕野原鐘のひびきに露皆
こぼる

白菊や我世に榮えよ身に榮えよさはれ真白の色
永久にして

のり合ひの渡し小舟に若き尼が宿世語らふ秋の
夕べや

◎

玉 子

黒髪のみどり五尺を供へたる盆燈籠に秋の風ふ
く

夕月にわがさまよひの袖ぬれぬ桔梗榮あり瑠璃

玉の露

◎

千仗喜美子

賣られ來てうつらゝの廓住まいわゝ秋風の胸
いたましむ

◎

花 月

朝廷に薄紅の花芙蓉化粧の水をそゞぎても見し
清 水 壽

美しくしき天の逢瀬をうたにして祝ぎまつらんか

七夕の宵

◎

吉野 絹子

夕風に袂ふかせて尋ねたる人はいませさす夕顔の
咲く

酒くみて冷麥すゝる竹椽に芭蕉葉越しの月美く
しき

大森 蝶子

山寺に百日紅の色あせて夕日斜に日ぐらしの鳴

◎ 眞宮 起雲

野に立ちて歌に倦みたる手すさびよ秋の七草花
環にぬかむ

秋の夕べ無心に動く雲の影を君語らずや興清か
らむ

花に狂ひ月に悶えの興も倦みぬ沈黙の君よ我を
召しませ

戦場の斷腸

林 天然

天奪高く星満ちて
數十餘りの天幕は

樹々はまばらに霞たち
軒をつらねて引張られ

篝火點々明滅し

こゝは何處ぞ遠東の
萬籟音なくしづめるに

こだかき丘を辿りつゝ
腕くみ合はせて座せる時

二

世にます人は多けれど
老ひたる母はたゞ獨り

エすがもすべも共白髮
國の爲めとはいひながら

うしや門出の其際に
母上暫し寂しさを

三

世界の歴史に我國の
忍ぶ恨みは十餘年

時機は來れり敵露西亞
腕のつゝかむ其限り

敵の滅ぶるそれまでは

駒は嘶く廣野原

王師の屯す野營なり
年猶若き士官あり

歩む姿は雄々しくも
丈夫の涙誰か知る。

果敢なきものはわれのみか
寄る年波はいや増すも

便りすくなの身の上や
思へば永劫の生別れ

笑もて涙うちはらひ
耐へたまひて恙なく

いひしも今はあだなれや、

御稜威示さむ時までと
日本健兒の奮ふべき

千歳一過げにこのとき
向ふ奴原斬りまくり

生きて還らぬ覺悟なり

知るや知らずや母上は
我が凱旋を待たるらん

四

ふりさけ見れば涙々と
雲山千里でらせども
ゆくへも知らぬわれ故に
何を夢みんこの夕べ
こよひ限りの見納めと
つきも哀れと思ひけむ
着空飛ぶ雁がね二三聲

五

折しも響く喇叭の音
眠さまして呼びたてぬ
故郷の空を伏し拜み
われは死地へと赴かむ
一日の如くはぐまれし
先立つ罪は幾重にも
剣とりなほし更ましく

指折り數へ今日明日と
されど母上ゆるされよ

月は東の中空に
故國に残りし母上は
いと暗路にふみ迷ひ
明日に迫れる激戦に
取出す寫眞みつむれば
雲に隠れて朧なり
夜既に更けて風寒し

暫しまどろむ兵士の
若き士官はこれまでと
『さらば母上いざさらば
二十餘年の春秋を
鴻恩報ゆる時もなく
ゆるさせ給へさらばとて
たち出でたるぞ健氣なる。』

老人物語

雨　峰　生　譯

これは原作韻文であつて『オーズオーズの泉』の歌なのを韻文でなく言文一致に意譯して見たのですけれど、どうも甘く出来ないので汗顔なのですが、いくらか、老人の言葉のうちの意味をくむが出来ますれば、嬉しいのでムリです、老人物語としたのは、對話中のマツシユー先生の方に重きを置いたのですから、其のつもりにて、讀んでください。

私たち兩人は、お互に懐しい、信の情を、うち明けまして、假令んは、マツシユーさんの方は、七十二にもならうと云ふ、お爺さんで、私の方はほんの子供とも孫とも云ふべき様な形では御座いますけれど、友達づれと云ふ鹽梅で、今そちこちと笑話なぞしつゝ、歩き廻つて居たので御座いました、應て廣く廣く、枝や幹を擴げて被い蓋つて居る、大きな樫の樹の下の處の苔や芝で一面奇麗になつて居る、休憩するのに屈境と云ふ處に、兩人

は坐を占めまして、そこで休憩するとしま
た、げに其處の芝生の間には一條の清水が、ちよろ
く、さらさらと、恰當白い小蛇かなんかい、く
ねりくねり行くやうに、私達の脚下を流れて居る
ので御座います、

私は「マッシュユー」さんと呼びかけ更に言葉を續
けまして、

『アノコンナに此の泉は、愉快な調子で流れて
居るのですから、何か流の調子に合ふやうな、鄙
歌でも何でも謡つて聞かせてくれませんか、この
暑い盛りの夏のに應はしいのを一曲謡つて呉れま
せんか、それでなくば會堂でお謡ひなざるわの讚
美歌かなんぞでもよう御座います、何なら、あの
去年四月頃お作なされた俗曲でもいゝのですか
ら、この涼しい樹の影の下で謡つて聞かせて下さ

いな』

と申しましたが、このお爺さんのマッシュユーさ
んは、何とも返事をしないで、只樹下蔭をさら〜
と流れゆく清水の方に斗り目を配つて、暫時黙つ
て何か考へて居つたものと見えました、が、この
何となく愛らしいそして、銀のやうになつて終つ
た白髪を翳せるお爺さんは、言葉を切り出しまし
た、

『嗚呼この泉の流の心地よく流れ去つて、末は
何處の谷の底、果てしも知れぬ處々と流れ〜て
ゆくものかと、熟〜思へば、この流の現在今も
流るゝ如く、行末とても同じくて、さては、千年
萬年も變るとなく流るゝならん、常の姿の羨まし
きに、思へば吾身如何にぞや、齡も未だうらわか
き、少年時代のその折には幾たびとなく、この川

邊、樂しき遊をついけつゝ、其の樂は朝暮に、斷
 ゆる時となかるらむ、永くも健に續くらんと思
 ひたりしも仇し夢、吾身も世々は古り果て、昔
 しながらの水音を耳にするさえなかくに、眼も
 涙はうるみながら、胸もふどくしてなりませぬ、
 今の様にと老ひばれましては、何事も駄目で御
 座んす、過ぎにし事は何事もかへす術なき事なれ
 ば、そは兎も角もの事ながら、此くも吾身も年古
 りし事と思ふと、何となう、心も痛き次第なので
 御座りまする、それに引き換え羨ましいのは、夏
 の梢に飛びかふ小鳥や、岡の邊にさすらふ雲雀、
 どれ程楽しい事かと思はれます、おのがし、樂しと
 思ふ其折は、花のやうなる冠をゆるめつ、伸しつ、
 欲する儘に身をあつかふ、すがくしたる其の様
 のいかにも羨しいと思はれます、搗て、加へて

小鳥奴はさがなき人の様ではなく、かの造化婆の
 爲すまゝに、身をは委ねて、彼此の善惡を争ひ、
 憂き惱み、心纏はるとしてなく、若きがうちは、
 若き時とて幸多く、老ゆれば老て氣も輕るやかに、
 暮すは何たる果報な事ぞや、吾身をこれに較へ見
 ば、憂愁浮沈世の柵に墮かれゆき、昔し歡樂の夢
 の跡をば、只この胸の底にのみ、浮べて見るがせ
 めての事、樂しと顔に現すなぞ、いと、稀なる事
 とのみ、成り果てしかと思ふにつけ、墓なきもの
 と思はるを考へ給へ見玉へかし、
 世には遠きく黄泉の旅に逝りし、その思ひ子
 の身の上を偲び廻らして、身にひき添へ考ひわづ
 らふ人にとりては、格別の幸もまた其の中にはあ
 るめれども、さてもくおのが身の今の今と云ふ
 今こそ、友と云ふべき友さえなく、獨りぼつちに

生き残れるわが身の程は、何となう、心細くも思はれます、何やかやとて、わが身の上、心配りをなし呉る他人もなきにはあらねども、儘にわが身を委ぬべき知己、親戚もなき事かと思ひ出づれば出づる程、悲しい事の限りです、

と云ふて語りしこの述懐、憂愁の眉根もわはれるに、おのれもえ堪えずなりましたから、私は、『お爺さん、そんなとはお止しなさいよ、お互に愚痴こぼすのはいけませんから止ませうよ、こんな廣びるとした野原にきたものを、拙きながらも、歌一曲なと呻吟もうでは御座いませんか、もしや貴下の御子息で再び此の世に歸らぬ人となりなると云ふ事なら、私や貴下の子息となりませぬ、』と云へば、お爺さんは、はつと私の手を握り、

オロ／＼聲にて、

『どうしてどうして、左様な事なぞ、ありませうぞと云へど中には、何か悲哀の種もやわらんと思はれました、

かくて兩人は此の小流の傍を立ち、滑かなる坂途をば辿り／＼て下りゆき、森の緑葉、茂り合ひ、小羊なぞの行き通ふ逕に歩みを進めてゆきました、とう／＼レオナルトの巖屋にまできました、

ろ、お爺さんは讚美歌やら、俗曲やら、物に狂へる調子の如、謠ひながらにゆきました。

隣れな花賣娘

村田 錦葉

「花え花え」と如何にも寒むさうに悲しむさうな聲を上げて花束を携へながら、京都三條通りを室町

邊へ来るのは年頃十二三の愛嬌のある少女である。

時は丁度一月の寒空に、袖口の破れた襦袢の上に裾の断れた袴を着て、チラ／＼雪の降るのに笠も被らず、足袋も穿かないで後断草履を穿いて居る姿は他目ながら實に可憐想である。

今花賣娘が通行るのを窓から見て居た眼のくりくりとした丸顔の腕白さうな男の兒が、

「姉上さん姉上さん、件の花賣娘が今來ましたよ呼びませうか、おい花賣娘さん一寸お出でな。」

「はい、有難うございます何のお花に致しませうか。」

「いやお花もお花だがね、少し要件があるから此所へお入り、と宅内に呼入れたのは品の佳い學生体な娘であつた。

「お前を呼んだのは外じや無い、之れを一包だけれど呈ふと思つて。」と紙包を與ふれば花賣娘は幾度も推戴き、懷中に納れた、而して顔には苦笑を合んで居た。

「お前の母親は繼母だつて過般云つたが什麼だいか愛つて下れるかえ。」

「はら」

「若し花の賣れない時にや母親様が叱りは爲ないの。」

「はい花の賣れない時は頭を殴れます、今日は未だ一把も賣れませんか、之れで歸つたら亦母親様に叱られます。」と雙眼には早や涙含んで居る。

「あ、僕でも買つてやらあ、可憐想到姉上さん此花皆買つてお遣りなさいな、なわ姉上さん。」

「わいよ買つてやるよ、お前其花を買つて上げる

「から心配するにや及ばないよ。」

「有難うございます。」

言葉は單であるが感謝の意は充分表示はれて居た。

「母様は何んだつて其様にお前を叱言るのだらうね、何時もお前を見る度に可愛想だつて皆が噂して居るのよ。」

「花の賣りやうが細少いとお母様が大きな目玉を瞋いて、お前は年ばかり大きくなつて五錢や六錢の商事が出来ないのか、幾年だと思つて居るつて怒鳴れます、私は夫れが恐懼ふんです、今朝もお茶碗を洗ふ時に過つて一個破滅したら大増責められて頭に此斯な瘤が出来ました。」と泣きながら瘤を撫で、居た

「本統に残酷いお母様だわねー、まわ火鉢で手を

暖めな、そうして此嚴寒ののに袷一枚で足袋も穿かないで克く辛抱する事ね。」

「姉上さん此少女に僕の足袋を遣りませうか。」

「は、は、松雄の足袋では駄目ですよ。」

「綿入や足袋を小兒の時から着るものじや無いて母様が調製て下さいませんの、過般も父様が京極から買つて来て下さつた花釵をお母様が之れはお前には過るつて妹に遣つてしまひましたよ。」と如何にも残念さうに袖口を口に喰へながら切齒して居る。

「夫れでもお父様は何もお母様に言はないのかえ。」

お父様は何も言ふ所ではありません、お母様の云ふ通りになさいます、那麼に御飯も三椀より澤山食べると直ぐ叱られます、……若し眞實のお母

様が今頃居したら斯様な事はありませぬものを何故實母は梅を残して死亡じまつたでしようか、最一度實母の顔が見たういします。」

語る少女より聞いて居る娘の方が一層の悲しみを催して兩袖を顔に推當て獻款して居つた、娘はつと起つて奥の間から雙子縞の一度ばかり水に浸したやうな綿入を一枚持つて來て。

「お前に此の綿入を上げるから仕立直して着なさい。」と花賣娘に渡した。

少女は餘りの事に難涙を流して、厚く禮を述べ歸つた。

その後、これを憐れに思つてこの家に花賣娘を下女に使うことにして、今も尙ほまめしく奉公してゐるとのこと、少女の歳は今年丁度十七で名を梅と呼び、妾の聞いた實際の話であります。

東京便り

▲親愛なる讀者諸君諸姉、其後は筆硯愈々御盛大の御事と存じ候。借も本年は兎角不順勝ちにて、折角の夏休みも大方夏らしき夏なくて相過ぎ申候。海水浴場や温泉場等の避暑地の不景氣なりしは致し方なしと諦め候はんも、全國擧つて稻の平年作を見る能はざるがため、地方の農家の心痛一方ならぬは誠に氣の毒の至りに候。小生の参り候東北地方に於ては、先づ六分作ならんかなど申され居り候。

▲諸君諸姉、前便申上候通り本年當會開設の保育法夏期講習會はまことに都合よく参り候。會するものは北海道より南は朝鮮、臺灣より殆んど全國の斯道篤志家を吸集致し候。其數百七十名、内、本會會員百五名會員外は六十五名、之を東京と

地方とに區分すれば、東京は百二十四名、地方四十六名の割合と相成り、殊に右の内男子聽講者十名を算へ候。講師の熱心と聽講者の熱心とは實に他の講習會に於て希に見る所の光景に相見へ申候。卷首掲ぐる所の寫真版は即ち、廿九日御茶の水幼稚園に於ける茶話會の際撮影せし所のものに在り。尙當講習會の講演事項は、或は本誌に順を逐うて掲載すべきか、或は其他の方法にて發表すべきかは目下考究中に御座候。

▲然しながら此の如きは尙本會の事業の一端に相過ぎ申さず候。本會の爲すべき事業としては例へば模範幼稚園設立の如き、保姆養成の如きも最も急を要する事業に有之候。何れ、諸君の御同情に由りて追々着手致し度くと存じ候。早々

先月中主任編輯者地方に旅行中なりしを以て本號編輯に關し遺漏の點少からず讀者の御了恕を乞ふ尙會報、會費領收等もすべて次號に讓る

明治三十八年九月

編輯部

明治三十八年九月一日開場

創設 每日授業

女子割烹家養成科

女子割烹家として學校教場に教鞭を取らんとする者。家庭教師として割烹の研究をなさんとする者の爲に新設する所なり。故に授業を毎日とし教授法を新撰し費用を節約し、割烹に附屬すべき各科を實用的に教授す

規則

(學期) 三ヶ月 第一回三十八年九月始業同十一月卒業

(學科) 日本料理、西洋料理、女子作法、造花、茶道、包方、活花、作法以下の各科は割烹必用の物、故に學科中に加へ授業する事とす

表	間	時	前		後	
			午	午	午	後
日	十八時より	十八時まで	實	習	四一時より	造花
月	十九時より	二時まで	心	得	五二時より	茶
火	十九時より	一時まで	實	習	四一時より	作
水	十九時より	一時まで	心	得	四一時より	包
木	十九時より	二時まで	實	習	五二時より	復
金	休日					
土	十九時より	一時まで	復	習	五二時より	活
						花

(學費) 東修金壹圓 月謝金參圓
 原料費 料理實習費用 同 茶道活花 包方造花 白辨

◎但學生に限り原料費を要せず習學する事を得
 ◎◎地方より來り習學する者の爲に高宿を許す費用一ヶ月金七圓程度とす
 ◎學費は東修金は入學の節、其他の費用は毎月五日迄に納むるものとす

(卒業證) 三ヶ月間全科修學者に授與す

○本養成科に附て問合せを要する事あらば申入るべし

東京市京橋區鈴木町十一番地

大日本割烹學會 教場

主任 石井泰次郎

初版忽ち賣切れ再出版來

愛知縣第二師範學校校長 小島政吉先生先校生 近森出治先生先作曲

一言致文 日本唱歌

○美本全四冊 正價各金八錢 郵稅各金貳錢

特色 全篇の歌詞は通俗優美にして、兒童の愛誦に適し徳性の涵養に資するものな撰みたり。



男女之研究

本書科學的研究に基き男女の起源及發達男女生殖上の差異諸現象男女形質及び生活の差異發生及發育人類生活の空前の發見を伴ふ關係等荷も吾人類が相偕に生活する異性の同類を如何にとりて之を研究するに必要なる事項を明快に解説したる眞に空前の名著なり

青年諸士教育者及父母の如何に本書が貢獻するところの多きは言を要せず。大方の諸彦幸に一讀以て其眞價を諒せよ。

帝國理科大学 教授 遠藤正先生 序文

坪井正五郎先生 序文

福岡縣中學 修猷館教諭 大鳥居奔三君 共著

宮崎縣師範學校 教諭 澤田順次郎君 共著

寫眞版 挿入

美麗裝釘全一冊 正價 金五十錢 郵稅 金六錢

人類界之現象 四版

洋裝全一冊 正價壹圓廿錢 小包郵稅十錢

天界之現象 四版

洋裝全一冊 正價壹圓十錢 小包郵稅十錢

自然物之利用 二版

洋裝全一冊 正價壹圓十錢 小包郵稅十錢

一日之化學界 二版

洋裝全一冊 正價壹圓十錢 小包郵稅十錢

發行所 東京市本町二丁目三番九號 神保町 神表區 田區 神市 京東 東京 東電 所行發

大賣場 東京市本町二丁目三番九號 神保町 神表區 田區 神市 京東 東京 東電 所行發

